



気儘電鉄浪漫譚

会員 野崎 洋平 (69期)

近年、巷で鉄道趣味が取り上げられる機会が多くなった気がする。鉄道趣味という、これまではどちらかというといわゆるオタクのイメージが強く、大手を振って鉄道趣味を公言することがはばかれることも多かった。

しかし現在では多数のメディアが鉄道イベント等を取り上げ、圧倒的男社会であった鉄道趣味の世界にも女性が進出し「鉄子」などと呼ばれるようになって久しい。

このように鉄道趣味が市民権を得られるようになったことは、鉄道趣味者にとってこの上なく喜ばしいことである。

趣味が仕事や社会で役立つことはよくあることである。趣味者によるボランティアの演奏会やスポーツ指導などは数多耳にする。趣味は自身の生活や心を豊かにするにとどまらないのだ。

その点、鉄道趣味は仕事や社会にどう活かせるか。一般的に考えると、鉄道マンになるという以外最良の選択肢が思い浮かばないかもしれない。

しかし、筆者のように三度の飯より鉄道が好きでありながら、鉄道マンという道を選択しなかった者もいる。そのような場合、鉄道趣味を仕事や社会に還元することはできないのだろうか。

東京は世界でも類い稀なほど鉄道網が発達した都市である。その利便性たるや計り知れないが、それ故に路線網が複雑怪奇に入り組み過ぎて、一見様お断りよろしく熟練利用者以外を拒んでいる程にすら感じることもある。

今はスマホ一つで何でもできる時代であるから、乗換え案内を駆使している乗客が大半であるが、時にはスマホを握りしめながら落ち着いた様子で辺りを見回す乗客を目にすることもある。

時に筆者は駅で列車を待っていると、「この駅に行くにはどの電車に乗ればいいですか」、「この駅にはどの電車が早く着きますか」などと話しかけられることがままある。

あらかじめ断っておくが、筆者は駅員の格好で列車に乗ったことなど一度もないのに、数か月に一度くらいの割合でこのような質問を受ける。



レールは繋がっていないが並ぶことはなかった、京成AE100形と京浜急行2100形の最初で最後の共演を都営交通100周年記念都営フェスタ2011にて

日本人だけでなく外国人から英語で質問されることも複数回あった。また、関西圏の駅でも同様の質問をされたことがある。

列車の乗り方について数か月に一度の割合で尋ねられることが頻度として多いのか少ないのかは見当もつかないが、筆者はかなり多いと感じている。そもそも、大勢いる乗客の中かなぜ筆者に声をかけたのか。

昨今は駅業務の多くが機械化され駅員の数が少なくなってきたとは感じるが、それでも一般乗客よりは駅員を探して質問した方が確実である。

筆者の列車を待つ姿は、他者の目にどう映っているのであろうか。鉄道博識を兼ね備えた自信満々な表情に見えているのであろうか。

尋ねた方からすれば、おそらくそんなことは全くなく、単に近くにいたから聞いただけであり、自意識過剰も甚だしいと言われてしまいそうである。

正直見知らぬ人から話しかけられるのはあまり得意ではない。他方相手からすれば藁にもすがる思いで尋ねていることであろう。

筆者が列車の乗り方を尋ねられた際はできる限り余計な情報は伝えず、わかりやすい回答をするよう心がけている。

ともすれば何てことない日常の一コマであるが、鉄道趣味も社会に貢献し得ると自己満足に浸る瞬間である。